令和７年度　国語（書写）部会研究計画

１　研　究　主　題

言葉を大切にし、自律的に学ぶ子供の育成

２　研究主題について

令和６年度「全国学力・学習状況調査」の結果[*1]によると、自分の考えを伝えるために「事実と感想、意見との区別が明確でないこと」「必要な情報を取り出すこと」「表現の効果を考えること」が全国的な課題として挙げられている。本県においても、同様の課題が報告されており、課題に鑑みて重視すべき資質・能力を「徳島版読解力[*2]」として整理し、多様な学習活動を通して育成を図る施策を推進している。

このような状況を踏まえ、本部会は、昨年度に引き続き研究主題を「言葉を大切にし、自律的に学ぶ子供の育成」とし、これまで研究を積み重ねてきた単元学習の理念[*3]とその成果も生かしつつ、子供一人一人が言葉を大切にしながら、自律的に学ぶ過程において、身に付けるべき資質・能力を育むことのできる、国語科（書写）教育の在り方についての研究を推進する。

（１）「言葉を大切にする」子供とは

本部会では、「言葉を大切にする子供」を「言葉による見方・考え方[*4]を働かせる子供」と捉える。子供は、自らの課題を解決していく過程において、「なぜ、この言葉が使われているか」「自分の思いを表現するために的確な言葉はどれか」などと言葉に着目する。そして、言葉の様々な側面から総合的に思考・判断し、理解したり表現したりすることを通して、言葉への自覚を高めることができるようになる。

わけても、文字を書くことを主体とする書写については、「言葉を大切にする子供」を「文字を大切にする子供」と捉える。文字を大切にするとは、書写学習を通して、文字感覚を高め合い、確かな書写力を身に付けることであり、相手意識や目的意識をもって自己表現することであると考える。文字は日常生活に不可欠で、各教科の学習活動の基盤となり、言語活動の充実のために存在するものである。文字を大切にすることは、生涯にわたり、文字文化の豊かさを楽しみ、継承・発展させる態度を育成することにつながる。

（２）「自律的に学ぶ」子供とは

本研究が育成をめざす「自律的に学ぶ子供」は、自らの学習の状況を把握しつつ、主体的・協働的に学習を自己調整しながら課題を解決していく過程において、学習指導要領に示された資質・能力を調和的に備えていく子供である。このような子供を育成するためには、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善やカリキュラム・マネジメントの確立、指導と評価の一体化を図ることが特に重要であると考える。

また、その際には、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「『個別最適な学び』と子供たちの多様な個性を最大限に生かす『協働的な学び』」の観点から学習活動の充実を図ることに留意したい。

３　研究の内容と方法

（１）国語

研究主題の実現に向けて、「言葉による見方・考え方を働かせ、考えを形成し、共有する単元の構想と展開」[*5]を軸として研究を進めていく。

①　考えを形成する過程における指導の工夫

考えを形成する過程においては、子供一人一人が、自らの課題に対して既有の言語に関する知識や経験を想起し、五つの言語意識[*6]を自覚しながら言葉や学び方を選んだり、結び付けたりしながら考えることができるように指導を工夫する必要がある。

ア　問いをつくるための指導の工夫

教師は、子供の興味・関心や必要感を育て、生活に根差した問いが生まれるようにする必要がある。子供一人一人が自らの言語生活と深く結び付き、意欲的かつ継続的に探求していくことのできる問いをもつための支援を心掛けたい。

また、言葉による見方・考え方を働かせながら粘り強く探求し続けて、自分の考えを広げたり深めたりすることのできる問いの質の向上にも留意したい。

イ　一人一人の学びの姿に即して学習を手引きすること

教師は、子供が自らの学びに応じて学習の手引きを選びながら活用していくことができるように、個々の学びの姿に即して学習を手引きする必要がある。子供が自分の思いや考えを形成したり、整理したりすることができるように、具体的な言葉で観点や例を示すことなどの工夫が考えられる。

ウ　探求の過程に言語活動を位置付けること

教師は、子供が探求していく過程に、自分の考えの深まりを実感することのできる言語活動を位置付ける必要がある。特に、「書きながら考える」「考えながら書く」などの思考を伴う書く活動により、そのときどきの自分の考えが広がったり深まったりしたことを自覚できるようにしたい。

②　考えを共有する過程における指導の工夫

考えを共有する過程においては、子供一人一人が必然性のある活動として、共有する目的を自覚していることが前提となる。そして、考えを共有する過程を通して、自分の学びの成果と課題を明らかにしたり、新たな考えを形成したりして自己調整することができるように指導を工夫する必要がある。

ア　必然性のある考えを共有する場面の設定

教師は、学習活動において、必然性のある考えの共有の場面を設定する必要がある。子供たちが自ずと共有するポイントを絞りながら、自他の考えを比較・検討したり、結び付けたりすることができるように手引きしたい。

イ　言語意識の明確化

考えを共有する場面において、教師は、子供が言語意識を明確にもつことができるように留意する必要がある。「誰に」「何のために」「どのような場面や状況、条件で」「どのような方法によって」「（その結果、）どうであったか」などを意識しながら、考えを共有することができるように、その手立てを講じたい。

③　単元の構想と展開における評価の工夫

教師は、目の前の子供の姿をもとに自らの指導を見直し、改善を加えながら、実際の授業に臨んでいく。「指導と評価の一体化」を進めるためにも、考えの形成と共有を螺旋的に繰り返していく過程において、子供一人一人が学びの軌跡を振り返り、自己の学びを自覚することができるように留意したい。その際には、本部会が取り組んできた「学習の記録[*7]」を効果的に活用することによって、考えの可視化を図りたい。

④　ＩＣＴ利活用の工夫

ＩＣＴを活用する際には、子供の学びが活性化されるように留意し、効果的な活用となるように工夫を凝らしたい。

⑤　国語科におけるカリキュラム・マネジメントに関する研究

国語科において育成をめざす資質・能力を体系的に把握するとともに、子供や学校の実態と重ね合わせながら年間あるいは６年間を見通した年間指導・評価計画に位置付ける必要がある。先の単元で習得した資質・能力が後の単元で活用されたり、同じ言語活動を発展させながら螺旋的に繰り返したりしていくなど、活用しつつ習得することによって、資質・能力が育成される。活用と習得の組み合わせを考える際には、それぞれの言語活動の特性を見据え、関連付けた計画が必要となる。

年間指導・評価計画を作成する際は、資質・能力の育成を図るうえでも、教科等横断的な視点に立ち、他教科等との関連を一層考慮したい。

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善の実現に向けては、学習指導過程の改善とカリキュラム・マネジメントの両輪が不可欠である。単元や授業においては、そのときどきの学習の状況を子供の姿等から的確に評価し、学びの過程の再構成、指導・支援の工夫・改善などを行うことにより、子供一人一人の学びを深めていきたい。

⑥　言語能力育成のための日常的な取組

ア　語彙指導の充実[*8]

語彙は、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素である。言葉による見方・考え方を働かせ、考えを形成し、共有する過程を充実させるためにも、思考を広げたり深めたりしていくことができるように語彙を豊かにする指導の充実が求められる。

イ　読書活動の充実[*9]

読書は、多くの語彙や表現を通して様々な世界に触れ、自分事として体験したり知識を獲得したりしながら、新たなものの見方や考え方に出会うことを可能にする。

（２）書写

①自律的な学び（主体的・対話的で深い学び）につながる授業改善

書写における、「自律的な学び」とは、子供が自ら課題をもち（主体的に）、考えを出し合ったりよりよい見方や考え方を認め合ったりしながら（対話的に）課題を解決するとともに、自らの学びを振り返り、次時の学習につなげて学び続ける態度（深い学び）のことである。

日々の書写学習が、生涯にわたって文字を書く喜びにつながり、文字を書くことに主体的に関われるよう導いていきたい。そのためにも、書写学習における授業改善を重ね、質の高い深い学びが実現できるよう支援していきたい。

主体的な学び[*10]	対話的な学び[*11]	深い学び[*12]
○書写学習に興味や関心をもって取り組んでいるか。 ○見通しをもって、課題に対して粘り強く取り組んでいるか。 ○自らの学習活動を振り返って、次時の学習や日常生活につなげようとしているか。	○子供同士の対話に加え、他者との対話を通じて、自らの考えを広げ深めているか。 ○あらかじめ個人で考えたことを意見交換することで、新たな考え方に気付いたり自分の考えをより適切なものに変えたりしているか。	○書写学習で習得した原理・原則や考え方を活用し、問いを見出して解決しようとしているか。 ○対話的な学びによって得られた自他の変容に気付き、それを他者に伝えたり受け止めたりしているか。 ○学んだことを他の学習や日常生活の中に相互に関連付け、生かそうとしているか。

②　学びの進め方

子供が書写学習の進め方を理解できるよう、主体的な学習活動を弾力的に展開する。また、教師自身も、子供と共に学びながら、自己を高めていく。

過程	学習活動	教師の指導・支援
①つかむ（課題把握）	基準（文字を書く時の原理・原則）を理解し、自分の課題をつかむ。	ア　子供一人一人がめあてをつかみやすいように工夫する。 ・興味や関心をもつ導入になるよう、教材や提示の方法を工夫する。 ・試し書きや日常に書いた文字の中から、課題を見つけられるように工夫する。 ・基準を明確にする。 イ　短時間でめあてをつかませ、書く時間を確保する。
②高める（課題追求）	学び合いを通して、創意工夫をしながら自分の課題を解決するように努める。	ア　子供の課題や実態に応じた支援をする。 イ　学習課題に応じた効果的な教材教具やＩＣＴ機器を有効に活用する。 ・分解文字　・水書用紙　・水書用筆 ・書画カメラ　・デジタル教材　・タブレット ・練習用紙（教師作成、児童作成） ウ　学習形態を工夫する。 ・ペアやグループ学習などの対話的な学習活動を取り入れ、自分の考えを広げ深めることができるようにする。 ・個に応じた学習課題や習熟度を考慮に入れた学び合いのグループ作りをする。
③確かめる（評価）	課題に沿った自己評価、相互評価をする。	ア　評価規準を明確にする。 イ　学習の成果だけでなく、学習過程を大切にし、個に応じた支援を工夫することによって、学習の意欲がさらに高まるように配慮する。 ウ　自分の課題に沿った自己評価ができるような学習カードや評価カードの工夫をする。 エ　友達のよいところを認め、励まし合う相互評価ができるようにする。
④生かす（発展）	学んだことを他の学習や日常生活に生かす。	ア　本時で学習したことが、関連した他の文字に生かせるようにする。 イ　次時の活動につながる意欲付けをする。 ウ　日常生活の中で、文字を書く喜びを見つけられるようにする。

③　個に応じた支援

ア　支援の必要な子供に対する指導の工夫
　（ＴＴ、ＵＤを取り入れた提示と活用、ＩＣＴ機器の活用　等）

イ　利き手に応じた指導の工夫
　（見やすい教材文字の位置・ワークシートの工夫、用紙の置き方　等）

④　文字に関する知識・理解と興味・関心

ア　用具・用材の知識、使い方

イ　漢字・仮名等に関する知識・理解

ウ　日本の文字文化に対する興味・関心

エ　文字に親しむ環境づくり

⑤　日　常　化

ア　カリキュラム・マネジメントの工夫

・書写学習と他教科等との関わりについての研究

（記録、日記、手紙、報告、詩、物語、短歌、俳句　等）

・社会に開かれた教育課程の工夫

（ポスター、手紙、色紙、礼状、うちわ、横断幕、灯篭　等）

イ　硬筆と毛筆の関連を考えた単元や教材の選び方

ウ　目的や場面に応じた総合的な書写力

（筆記具の選択、書く速さ、縦書きや横書きの様式への対応　等）

○日常化において

現在、学校教育の中ではＩＣＴ機器の活用が進むに伴い、手で文字を書く機会が減りつつある。文化庁が行っている「国語に関する世論調査」（平成２７年９月）によると、９割を超える人が、「手書きの習慣を大切にするべき」と答えており、１０～３０代を中心に手書き習慣のよさが見直されてきている。また、令和３年度の調査（令和４年１月調査）によると、情報機器の普及で受けると思う影響について、約９割の人が「手で字を書くことが減る」「漢字を手で正確に書く力が衰える」と答えており、改めて書写学習の必要性を感じる結果となっている。さらに、各教科等の具体的な改善の方向性を議論する「国語ワーキンググループ」（平成２８年８月）でも、国語科「書写」について、漢字や仮名の由来など文字文化に対する理解を深める学習の重要性や、視覚、触覚、運動感覚など様々な感覚が複合する形で言葉を学習していく「手書き」の大切さを議論している。

手書き文字[*13]には、ＩＣＴ機器類等の情報端末による文字にはないよさがある。それは筆記用具さえあれば、いつでもどこでも書くことができるという便利さであり、メモを取る等の速書きのよさである。何より、気持ちをこめ、丁寧に書いた文字にはぬくもりがあり、文字を書き進める過程で書き手の個性や思いが表れるよさである。手書きすることは、単に情報を伝達するだけでなく、相手を意識したコミュニケーションの場であり、自己表現の場である。文字を大切にするという考え方が基盤となり、文字を大切にすることを通して人や物を大切にするということにもつながる。このような意識をもって、書写で培われた力が生活の様々な場面で発揮されるよう配慮したい。

---

*1　教科に関する調査結果（国語）から、「事実と感想、意見との区別が明確でないなど、自分の考えを伝えるための書き表し方の工夫」と、「自分の考えなどを記述していても、必要な情報を取り出すことや表現の効果を考えること」に課題が見られた。

*2　「徳島版読解力」は、次の「５つの力」で構成される。

①正確に読む力　②必要な情報を取り出す力　③比較・関連付けて理解する力　④見直す力　⑤発信する力

*3　本研究は、自らの学習課題を設定し、その解決に向けて思考・判断・表現を重ねるとともに、学習の記録をもとに、学習の節目で自己の取組を振り返りつつ、修正や変更を加えていくことができる子供の育成をめざした「単元学習の理念を生かした指導」に関する研究と軌を一にする。次は、単元学習の理念の要素をまとめたものである。

①単元を通した指導目標と子供の活動目標が明確に設定されていること

②身に付けるべき言語能力を適正に育成すること

③子供の主体性を重視していること

④学習の自覚化を図っていること

⑤展開の過程に、他と関わり合う交流の場が位置付けられていること

⑥子供の発達に応じ、教育課程全体を見通し言語活動が位置付けられていること

*4　言葉による見方･考え方を働かせるとは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることである。この「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりする」とは、言葉で表される話や文章を、意味や働き、使い方などの言葉の様々な側面から総合的に思考・判断し、理解したり表現したりすること、また、その理解や表現について、改めて言葉に着目して吟味することを示したものと言える。

*5　「『個別最適な学び』と『協働的な学び』」の一体的な充実」を国語科として探求していく方策として、令和２年度より、「言葉による見方・考え方を働かせ、考えを形成し、共有する単元の構想と展開」に取り組んでいる。

*6　学習指導要領において、相手や目的、場面などの「言語意識」が、学年段階と領域内容に応じながら、螺旋的に高められるように配意されている。「言語意識」は、子供たちが言語活動を振り返る際の観点となる。

小森茂氏による、「五つの言語意識」は，次の通りである。

①自分にとっての相手意識

②（①を受けて）自分にとっての目的意識

③（①②を受けて）自分にとっての場面や状況，条件意識

④（①②③を受けて）自分が意図的，計画的に活用するための表現や理解の方法意識

⑤（①②③④を受けて）自分の表現行為や理解行為を自己評価する評価意識

*7　「学習の記録」は、学習の手引きや成果物、振り返り、音声データや映像などのＩＣＴ機器によって蓄積されたものなどがある。「学習の記録」は、子供一人一人が学びを自己調整することや、自身の考えの変容や成長、課題などに気付くこと、次の学びに対する意欲を高めることに有効である。また、自己の学びを振り返り、自覚することができるようになる。教師は、それらの記録から、一人一人の学びの姿や考えの変容、意識の流れ、学びの意味や可能性を捉えるなどして、価値付けていくことにより、「指導と評価の一体化」を進めていくことも考えられる。

*8　語彙指導をする際には、教師は、学習指導要領に示されている各学年の語彙指導の重点を踏まえつつ、学習や日常生活の機会を捉えて意識的に言葉を投げかけたり取り上げたりしながら、適切な使い方ができるよう指導していくことが大切である。また、辞書や事典を利用して必要な語句等を調べる習慣を身に付けさせたい。

*9　子供の豊かな読書生活をつくるためには、日常的に読書に親しむ態度を養う指導に留まらず、その一人一人の発達に応じて、情報を収集したり、考えを形成したりする際に役立つ読書へと系統的に高めていく必要がある。また、授業においては、子供が目的に応じて図書を選んだり、目的に応じた読み方（精読・速読等）を選択したりするなどの指導を工夫したい。

*10　「主体的な学び」とは、文字を書くことに興味・関心をもち、毎時間見通しをもって粘り強く課題に取り組むとともに、自らの学習を振り返り、次時の学習につなげる学びのことであると考える。つまり今、学習していることが自分にとってどのような意味をもつのか、何をめざしているのかなど、課題を自分のものとして捉え、意欲的に課題に取り組めるよう支援することが大切である。また、学習活動を振り返って、「できるようになった」「分かった」という自覚をもつことにより、学習に対する意欲がさらに高まる。

*11　「対話的な学び」とは、子供同士の協働、教職員や地域の人たちとの対話を通して、自ら習得した技法や考え方をより広げたり深めたりすることであると考える。自らの思いや考えを他者と伝え合うことで、新たな考え方に気付いたり、自分の考えをより適切なものに変えたりすることができる。このように、他者との対話を通して、互いの考えをすり合わせ、自己の視野を広げ問題解決を図る場面を、単元全体や授業の中に明確に位置付け、計画的、系統的、継続的に展開していく。

*12　「深い学び」とは、子供が学習過程の中で、書写学習における「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、問いを見出して解決しようとしたり、思いや考えをもとに創造したりすることに向かう学びであると考える。対話的な学びによって得られた自他の変容に気付き、それを他者に伝えたり受け止めたりしながら、他の学習や日常生活の中に相互に関連付け、生かしていくことが大切である。なお、書写における「見方・考え方」とは、「文字を書くことを、文字の原理・原則に着目して捉え、理解したり伝えたりしながら表現し、文字への自覚を高めることである」と考える。

*13　手書き文字とは、手以外の体の部分を使って書く場合も含む。